

時潮の流転

(昭和十四年寮歌)

望月真三郎君 作歌

竹村伸一君 作曲

一

時潮じちようの流転ながれそう淙々そうと
四季とき乾坤けんこんに巡りめぐ立つ
去来きよらい常いつねなく人ひと変りかわ
有情うじよう無為むゐの時鐘かねの音ねに
孤城こじやうの爽春はるは未だまだ浅しあさ

二

遠くとほ流離りうりの春はるにきて
此この高樓たかのうに春愁うれひつつ
郭公かくこう鳥とりの鳴くなさへも
多感たかんの児等こちらの情懷むね熱くあつ
懷古かいこの涙なみだ溢るあふべし

三

真日まひ澄すむ北きたの蒼穹そらはるか
飛燕ひえんひとたび音おとに鳴なけば
桃李とうりの華影かげは瘦やせゆきて
あはれ旅寝たびねの若きわか遊子ごよ
帰南きなんの郷愁おもひしきりなり

四

夕陽せきやう西にしに落ちお行ゆけば
白樺しらば林はやし朱あけに染しみ
暮秋ぼしゅうの颯かせは飄々ひょうひょうと
時艱じかんを憂うれふ国くにの子この
悲腸ひちやうの声こゑに似にたるかな

五

北斗ほくとう地平ちへいに揺曳ゆゑぐとき
天地てんちの四大しだい霜しもと凝りこ
四寮しりようの高夢ゆめも凍いてつきて
ほがらほがらの朝あさぼらけ
帰雁きがんの孤影かげよ月つきに飛とぶ

六

明日あす別わかれ行く旅人たびとの
春はるの夕ゆうべの宴遊うたげかな
かへらぬ絢夢ゆめをしのびつつ
生命いのちの故郷さとと慨嘆なげきしも
すでに三星みとせ霜くさの草枕まくら